
愛していると言えば、嘘になる

蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛していると言えば、嘘になる

【Nコード】

N4982Y

【作者名】

蘭

【あらすじ】

気が付いたら、知らない場所にいました。私は誰？ここはどこ？何も分からないなりに、ツンデレ少年、妙齡の騎士様、フェロモン系の騎士様など、巡り合いに恵まれて自分の居場所を見つけていく少女のお話です。ゆっくり更新になります。

誓いの言葉

そして娘と王子様は結婚し、ずっと幸せに過ごしました。
めでたし、めでたし。

彼女はベッドの上でお気に入りの絵本をめくっていた。子供のころは母親にせがんで毎晩のように読んでもらっていたものだ。最後のページが特に好きで、それまでに出会った色々な人や動物に見守られて寄り添う王子と美しい娘の絵を飽かずに眺めていたものだ。

明日、自分も同じように友人や家族に見守られて結婚する。思っていたよりちよつと早かつたけれど、素敵な教会も白いドレスも薔薇のブーケも絵本と同じだ。子供の頃の絵本になぞらえて結婚式をするなんて乙女チックだな、と自分のことなのに笑いがこぼれる。

明日の朝は早い。絵本を閉じて、明かりを落とし今日でお別れになるベッドにもぐりこんだ。

明日はきつといい日になる、と言い聞かせながら。

結婚式の準備は抜かりなく進められたし、式の予行練習もした。当日になって夫が指名していた牧師が急病とのことで代役が入ったが、それ以外は皆予定通りだ。

それでもやはり緊張しながら、彼女は教会の扉が開くのを待っていた。いよいよ入場の音楽が流れ、父の腕にかけた手に少しだけ力がこもる。歩き出す前に娘の方を振り返った父が「大丈夫、綺麗だよ」と見当違いな励ましをくれた。

バージンロードをゆっくりと歩きながら、彼女は昨日見た絵本の最後を思い出す。

ほら、友人達が来てくれている。この間まで高校の教室で笑いあ

ついていたのに、今日は皆めかし込んで大人びて綺麗だ。神妙な顔そして彼女の方を見つめている。海を越えて遠くから駆けつけてくれた親戚もいる。昔から良くしてくれていた伯母さんが涙ぐんでいる姿が見えた。大丈夫、幸せになれる。あの絵本と違うのは、娘が王子様を愛してはいないということだけ。それだって知り合う時間が足りなかっただけで、きっとこれから仲良くしていける。お父さんもお母さんも、彼はいい人だって言っていたもの。これからは両家で力を合わせていけば、お父さんの会社もきつと立ち直る。皆きつと良い方に行く。

そう自分に言い聞かせながら、ついに知り合って間もない夫のもとへとたどり着いた。

出会ってからいつもそうだったように目じりに皺を寄せて微笑む夫は、彼女の手をとり牧師に向き直った。彼女もそれに倣い、祭壇を仰いだ。

今朝慌ただしく挨拶をした牧師はどここの国の人なのか、とても綺麗な浅葱色の瞳をしていた。その瞳を和ませて、二人に語りかける。彼女は高まる緊張に、有難いお話を殆ど覚えていられなかった。背後ではどつと笑いが漏れていたのだ、きつと面白いことなど言っただろう。

名前を呼ばれてはつとする。

「汝、仙崎杏奈はこの者を夫とし、生涯愛し抜くことを誓いますか。」

彼女は深く息を吸って、青い瞳に向かって答えた。

「はい、誓います。」

そこで、突然世界が暗転する。彼女には恐れる暇も何もなかった。

目覚め

彼女は多くの人ざわめく気配で目を覚ました。頭の後ろが酷く重く感じる。体を横に向けて目を開けると灰色の石が敷き詰められた床が目に入った。ざわめきからは意味を成した言葉は聞き取れない。酷く埃っぽい臭いが鼻について思わず顔をしかめながら、ゆっくりと上半身を起こした。

(ここは、どこだろうか。)

首を軽く振って辺りを見回すが、全く見覚えのない場所だった。天井の高い石造りの建物の広い空間に大量に長い椅子が置かれており、人があちこちで動き回っているのが見えた。

(教会?)

奥の方に大きな石像のようなものが掲げてあるのをみて、ぼんやりとそう思う。しばらく床に座り込んでいたが、新しく思い出されることも何もなかった。とにかく自分が今どこにいるのかを確認しようとして辺りを見回した。自分がいた隣に何人も人が寝転んでいる。明らかに顔色の悪い者もいて、病人を集めているのではないかと思えた。奥に向かって視線を動かすと大きな椅子を使っているいくつかのエリアに空間が仕切られており、かなりの人数の人がいることが分かった。その更に奥に小さな祭壇が見えた。人は沢山いるのを見たことがある顔はなかった。誰も自分に気がついた様子もない。

いったいどうすればいいのだろうと、辺りをもう一度慎重に眺めていると祭壇近くで男の大きな声が上がった。すぐに周りにいた者まで何か大きな声で言いあい始めた。聞き取ることはできないが、

怒鳴り合いであることは分かる。高い天井に音が反響してまるで周りで男たちが怒鳴っているように聞こえる。見守るものはみな巻き込まれたくないというように俯き、縮こまる。彼女もただ座りこんだまま、何もできずにそちらを見ていると、黒い髪の少年が男達の喧嘩を止めに入るのが見えた。怒鳴り声に紛れて彼の言葉は聞こえないが、身振り手振りは明らかに大人達を諫めようとしている。

だが、激昂している中年の男たちに比べて少年はいかにも細く、顔つきもまだ幼い。男達は素直に引きさがったりはしなかった。むしろ少年を小突いて馬鹿にしたかのように嘲笑った。

「なんだ、腰ぬけ村長の倅が偉そうに。だったらお前が何とかしろよ。親子揃って口ばっかか。」

男たちがせせら笑うと、少年は眦を切って男を睨みつけた。

「なんだと？親父は逃げたんじゃない、先頭切って逃げたのはお前の方だろ。」

そこから再び喧騒が大きくなった。少年は男に殴りかかり、男が殴り返し、とうとう殴り合いの大喧嘩だ。

どうやら、ずいぶん大変なところに居るようだ。

「うんやう？」

喧騒は止まず、誰もが息をつめて喧嘩の行方を見守っていると、不意に大人の怒鳴り声に子供の泣き声加わった。幼い子供のぐずる声があつと言つ間に大きくなり、火のついたように一人が泣きだすと、伝染するように子供の泣き声が増えてくる。彼女が泣いている子供の姿を見つけるよりも早く、前方で喧嘩していた集団の一人から大きな声がかかった。

「うるせえ。誰か、黙らせるよ。」

中年の男達はそう言つて、しかし、氣勢が削がれたのか悪態をつきながらも殴り合いは止まったようだ。先ほどの少年は、まだくすぶっている大人たちの輪を抜けて、乱れた頭髪を直しながら走ってくる。彼女は彼の目指す方をみて、泣いている子供達を発見した。小さな子供たちが肩を寄せあいながら、顔を真っ赤にして泣いている様子に思わず立ち上がって歩み寄って行く。椅子と人を避けながら駆けてくる少年よりも彼女の方が早く子供たちの元にたどり着いた。

「怖かったね？」

中でも特に小さな男の子の肩を抱いて声をかけてやると、戸惑うように少し泣き声小さくなった。

「泣かないで。大丈夫よ。」

何が大丈夫なのか、自分自身さっぱりわからないままそう声をかけてやると、わずかの間で幼児の泣き声はますます小さくなり、ぐずぐずと鼻を鳴らしながら彼女の肩口に顔を埋めてきた。もう片方の手で近くにいたもう一人、4、5歳くらいの長いお下げの少女の小さな頭を撫でてやると、少女も彼女の腰のあたりに抱きついてき

た。「怖かったね、もう大丈夫だからね。」とそればかり繰り返している、子供は次第に落ち着いてきた。周りで半べそだった少し年嵩の子供たちも不安げな眼差しながら涙は引いてきたようだ。

「だあれ？」

彼女に抱きついていた少女が、まだ赤い目のまま問いかけてくる。彼女は微笑んで返事をしようとし、そして言葉が出て来ないことに気がついた。

自分の名前が思い出せない。名前だけでなく、どこから来たのかも、家族のこと何も覚えていなかった。分からないことが多すぎて、思い出せないという感覚ですらない。笑顔を中途半端なまま凍りつかせて黙り込んでしまった彼女を見上げて少女は目をしばたかせている。

「えーと、何だろう。」

視線を宙に彷徨わせても、答えなど思いつくはずもない。棒立ちになったまま困り果てていると、今度は最初に抱き寄せた子供が声をあげた。

「アーア」

まだ喋れないのだろう。頭を撫でてやるとアー、アーと繰り返して笑いかけてくる。

「アーニヤ？アーニヤっていうの？私、ミーナよ。」

ずっと彼女の返事を待っていた少女が問いかけてきた。子供の舌足らずの呼び声がアーニヤと聞こえたらしい。彼女はどうも違うようだと言葉をかしげる。

「アーニヤなんて知らない名前だな。うちの村にそんな名前の子供はいない。お前の顔もみたことがない。」

先ほど殴り合いをしていた少年が既に隣にやってきていた。近くで見ると思ったよりも背が高く彼女は少し見上げるような関係にな

る。まだ細い体つきや、幼さの残る顔立ちからするとまだ14、15歳ではないかと思われた。少年は大きな目を細めて不審そうに彼女の顔を見ていた。雨が降った後の大地のような深い茶色の瞳を見つめ返して、彼女が言葉に詰まっていると、彼は周りにいた子供たちを見回して同意を求めると10人足らずの子供たちは一様に頷いた。彼は子供たちのリーダー格の存在であるようだ。

「そう。皆も知らないの。」

彼女はため息をついた。だいたい名前を改めて問われた時点で、自分が子供たちの知り合いではないことは分かってきている。お前は誰だ、と言わんばかりの子供たちに向かってゆっくりと話しかけた。

「私も、分からないの。自分がどこからきて、どうしてここにいるのか。思い出せないのよ。それに、ここはどこなのかしら。」

素直に告白すれば、リーダー格の少年を含めて子供達はきょとんとした顔になった。

私はだあれ？

子供がすっかり泣きやむ頃には、大人たちの揉め事も落ち着いたらしく教会の中はずいぶん静かになっていた。

車座になって石の床に座り込み、子供たちが代わる代わる説明してくれた話をまとめると、ここは国の外れの小さな村の、そのまた外れにある教会であるらしい。昨夜、村がモンスターの群れに襲われ、村人は命からがら教会へと逃げてきたという。モンスターとは一体何のことなのか彼女には全く分からなかったが、襲われたというからには恐ろしい体験だったのだろう。子供たちに詳しく思い起こさせることも憚られて、質問は控えた。

「騎士様が来てくれなかったら、皆殺しだったかもしれない。」
少年がぼそりと呟いた。皆殺しとは穏やかではない。モンスターとは人の命を奪うものであるらしい。しかし、そこにはそれ以上踏み込むべきではないだろう。もう一つ気になった言葉があった。

「騎士様？」
そう聞き返すと、10歳になるやならずの少年は顔をあげて大きく頷いた。

「そうだよ。王都から騎士様が皆で来てくれたんだ。それで早く逃げろって言われて村の半分も逃げたところでモンスターが出てきた。早く逃げ始めてなかったら、皆寝ているところを襲われて、きつともっと大変なことになってたよ。」

モンスターの襲撃について先触れがあったということらしい。子供たちが言うには、今は広間の中には村人しか見当たらないが外には騎士様達がいるのだという。

「今だって教会を騎士様が守ってくれてるんだ。だから、ここに居れば大丈夫。」

少年は両膝を胸に抱きかかえるように身を丸くしながらそう言った。ウィルと名乗った先ほどのリーダー格の少年がその頭を軽く撫でてやると、少年は顔を膝に埋めて更に丸くなった。体を縮めるようすは恐ろしかった気持ちを表すようで、ウィルが肩を抱いてやっ
ていなければ、彼女が抱きしめていたと思った。

そのウィルは先ほどの喧嘩の内容などから察するに、村長の息子であるらしいが、彼の親も昨夜以来見あたらなくなってしまうらしい。子供たちの中では最年長らしいが、それでもまだ14か15歳だろ。少年にとって、それはとても大きな不安だろう。

自分に記憶が無いのは、そういう混乱の中で頭を打ったせいかもしれない。そう思って年のため頭を触ってみるが痛むところは無かった。あるいは、とを思いを巡らす。とても怖い思いをして忘れてしまっているのか。それだったら、思い出すのも恐ろしい気もする。ただ怖い思いをしただけならば、自分が何かを忘れたとしても、周りの子供達が自分を覚えていない理由がない。子供たちによれば、この教会に避難しているのは一つの村の住人だけで、村の人は皆顔見知りだと言う。つまり、自分はこの村の住民ではなかった、ということになる。村どころではない。王都、騎士と聞いて彼女は王様がいて、国を治め、騎士が国を守るのだということはおぼろげに理解できたが、国の名前も王の名前も何も思い起こすことはできなかった。自分はこの国のものでもないのかもしれない。では、どの。と自ら問うてもやはり答えは出なかった。子供たちも彼女がどこからきたのか全く見当もつかないという。

一体、自分はどこの何者なのだろうか。

もしかしてお嬢様？

（普通の記憶喪失の人というのは、どういう気持ちになるものなのかしら。）

彼女は、膝の上で寝てしまったミーナの頭を撫でながら考える。彼女は不思議と静かな気持ちだった。恐怖も焦りもない。何を恐れたいののかも分からないし、急いで何をしなければいけないのかも分からない。とりあえず、ここにいる人達はみな家を追われ、ここでしばらく暮らすようだ。同じように居させてくれたら、当座は生きていける。

まるで他人事のようにそう思いながら、彼女は子供たちの話に耳を傾けた。何の記憶が分からないが、誰かに聞いてもらうと不安が和らぐという説があったような気がする。彼女の傍、というよりもウィルの傍なのだろうが、に集まっている子供たちの大半が避難中に親とはぐれてしまった子どもだった。ミーナはちょうど親が隣町に出かけている間に襲撃にあったということだ。ミーナの両親は運が良ければ、この災難を逃れてどこかの村で避難しているかもしれない。いずれにせよ彼らに共通しているのは、頼れる大人が教会の中にいないということ。そういう意味では、彼女も子供たちと同じ境遇だ。子供たちも自然とそれを察したのか彼女を受け入れてくれた。彼女の膝で寝入ってしまったミーナが彼女のスカートを掴んで離さなかったことも原因の一つだったかもしれないが。

子供たちの話を聞き終る頃に、大きな教会の扉が開いてガシヤリガシヤリと音を立ながら甲冑を身に付けた男性が入ってきた。その銀色の甲冑と村人の誰も手にしていないような立派な剣から、騎士様の一人だろうと思いが当る。

「夕食の支度ができたそうだ。順に食堂へ。」

彼がそう声をかけると、村人は次々と扉を出てどこかへ向かっていく。子供たちも立ち上がり、彼女の手を引いた。

「教会の食堂で毎日朝晩、食事が食べられる。これも騎士団が居るおかげだ。俺たちだけじゃ食べ物まで持って避難なんてできなかった。」

ウィルが説明してくれる。

「夜の移動は危ないから昼の時間に外から物資も運んでくれるそう。だから食べ物も当面心配いらぬ。服も、そのうち届くと言った。」

教会へ避難はしているものの陸の孤島のように孤立してしまっている訳ではないようだ。

建物の外へ出てみると屋根だけがかつている渡り廊下のようなものがあり、その続く先に行くつか小さな建物が見えた。振り返ってみると自分たちのいた場所がおそらく教会の最大の建物であり祈りを捧げる場であつただろうということが分かる。

建物の扉の外や廊下の数か所に先ほどの騎士と揃いの甲冑をきた男たちが立っている。いったいどれだけの数の騎士がいるのだろう。先ほど、少年は騎士が守ってくれるから大丈夫と言つたが、襲ってくるかもしれないモンスターについても、騎士についても何も思ひ出せない彼女は、本当に大丈夫なのか少し不安に思つた。

食事は質素なものだつた。固いパンと豆の入ったスープを配られて子供達と一緒に食べる。小さな子供の面倒を大きな子供が見ながら決して多くない食事を平らげた。元は教会の食堂ということであるのスペースのある部屋ではあつたが、村人全員を一度に収容できる広さは無い。食べ終わるとすぐに立ち去らねばならない。子供たちは足りないとも、美味しくないとも文句を言わず、きちんと食べて席を立つた。我儘を言わなくて偉いのね、とまだ喋れない少年の頭を撫でて褒めると、傍にいた7、8歳くらいの少女が不思議

そんな顔をした。

「ちゃんとご飯を食べさせてもらえるのに、我儘言う子なんていないでしょ。お姉ちゃん、本当はいいところのお嬢さんなの？あ、そうだ。ちよつと手をみせてよ。」

彼女が手を差し出すと少女はさつと掴んでまじまじと眺めた。

「お母さんが、いいとこのお嬢さんは水仕事も畑仕事もしないから手が綺麗って言ってたんだ。ほら、やつぱり、とつても手が綺麗よ。」

言われて、改めて自分の手を眺めると白い肌に短く揃った艶やかな爪。こぶや傷はなく柔らかい手肌だった。

「お嬢様がー。」

いまひとつピンとこないが、確かに周りにいる村人に比べてみれば、手の柔らかかさや肌の白さは段違いで、自分が畑仕事をして暮らしていたとは考えにくい。

「そうだったのかしら？」

子守唄

元の大きな広間は礼拝堂と呼ばれているらしい。彼女は子供達と一緒に礼拝堂に戻って固い床に薄っぺらな布を引いて寝転がった。時間の感覚は無いが、外は暗い。小さな子供は寝かしてしまった方がいい。子供の横に寝転んで背中を軽く叩きながら子守唄を口ずさむ。子守唄を途切れず歌い続けて小さな子供たちが皆寝てしまった頃、やっと口を閉じた。水をどこで汲めばいいかも分からないのに喉が乾いてしまった。

「なあ。」

一緒に子供を寝かしつけていたウィルが起き上がって小さな声で呼びかけてきた。

「さっきの歌はなんだ？」

そう問われて、自分も起き上がりながら考え込む。

はて、歌は覚えているが歌の名前は分からない。

「子守唄よ。名前は忘れてしまったけど。」

「子守唄？」

「知らない？」

不思議そうな顔をしているウィルに問いかけると、首を横に振られた。

「子供を寝かしつけるときに歌う歌のことなんだけど。」

「寝かせるときに、歌を歌うなんて初めて聞いた。」

そう言いながらウィルは大人しく寝ている小さな子供達を見まわした。

「随分効くんだな。」

そう言いながらウィルは隣で寝ている子供の前髪を払ってやる。

小さい子供が静かになって改めてウィルを見ると、先ほどの喧嘩で殴られたのか服の襟から除く鎖骨のあたりが赤く腫れていた。唇

の端も痣になつている。殴り合いの喧嘩を始めた時は、喧嘩つ早い少年かと思つたが、本当は優しい子なのだろう。子供たちの面倒をよく見ていたし、慣れてもいたようだから昔から村の子供たちのよき兄代わりだつたに違いない。

「もう一回歌つてあげるから、ウィルも寝たら？」

その声をかけると、彼はぎよつとしたように彼女をみてから勢いよく横に首を振つた。

「寝かしてつけてもらわなくても寝られるから！お前こそ早く寝ろ。」

そういつてごろりと床に寝ころぶと、彼女に背を向けてしまった。彼女はその耳が赤くなつているのをみて、思わず微笑みながら自分も子供たちの脇に寝転んだ。

「おやすみなさい。」

「・・・おやすみ」

すこし間を置いて返つてきた言葉に彼女は目を閉じたまま笑みを深めて、そして程なく眠りにつくことができた。

小さな悩み

ミーナの聞き間違いがそのまま名前として採用されて彼女はアーニヤと名乗ることにした。右も左も分らないことには変わりなかったが、それは異常事態に巻き込まれたばかりの村人たちも同じことだったので、それほど時間をかけずに子供たちに馴染むことができた。これには、他の村の子供にするのと同じか、より以上に世話を焼いてくれたウィルのおかげであるところが大きい。生活に必要なものの場所、村人の名前や職業、料理の名前など何を聞いても馬鹿にせずにきちんと答えてくれる。

毎日、彼と一緒にになって幼い子供たちを庭で遊ばせていると、次第に彼女達に自分の子供の世話を頼む親まででてきた。それをきっかけに少しずつ村の大人たちとも交流ができるようになったのだが、そうやって知り合う誰に聞いてもやはり彼女がどこの誰なのかは分からなかった。

それでも彼女は日々の子供たちの世話で精いっぱい一人で思い悩む暇もなかったし、自分の身分を証明する必要にかられることもなかったのだ、やはり焦ってはいなかった。何よりも無邪気に自分を頼る子供たちの様子に自然と自分の居場所を感じることができて狭い教会という世界の中で安心感を得られていた。

最近のアーニヤの悩みは自分が何者かということよりも、教会のまわりがどうも臭うし、なんだか薄汚れてきていることだった。礼拝堂の一部に隔離されているが病人もいる。集団生活が長引くのであれば清潔な環境を維持しなければ風邪や、もっと性質の悪い病気が流行るかもしれない。アーニヤは教会での生活ぶりを振り返り、改善できないかと思いを巡らせた。

子供と自分の衣類は天気の良い日に、こまめに洗うようにしてい

るし、病人たちの使う布類も清潔を保てるように洗濯を引き受けてはいる。しかし心から休まる時のない生活が続けば体力だつて落ちてくる。洗濯をするくらいのことでは風邪の流行は防げないだろう。何かできないかと思つて考えてみると、子供たちはもちろん大人たちも、まったくこの場を美しく使おう、保とうとしていないことにすぐに気が付いた。とりたてて汚して回るわけではないが、泥だらけの靴で歩き回るのも、こぼした何かを放つておくのも、彼らにとっては当たり前のようなものだ。清潔を保つという習慣がないのかと思つほどに、誰もが無頓着なのだ。

他の人はあてに出来そうにないが、何か手を打たないと環境は日々悪くなるばかりだ。

ある晴れた日、アーニヤは比較的年上の子供たちに幼い子供の遊び相手を頼むと、自分は騎士の詰所に付近にいた僧侶風の老人の元へ向かった。誰もが彼にものの在り処を尋ねにくのを知っている。おそらく、彼がこの教会の元々の管理者のはずだ。

「あの」

若い騎士と立ち話をしている老人に声をかけると、老人は優しいな笑顔で振り返った。顔には疲れが滲んでいるが穏やかな人柄が感じられる笑顔に安心する。

「どうしたかな、お嬢さん。」

「お願いがあるんです。」

アーニヤが質問と、それに続けてお願いを説明すると老人と先ほどまで話していた若い騎士は二人で顔を見合わせた。

「貸していただけませんか。」

困惑したような二人にアーニヤは重ねてお願いする。

「いや、まあ、構わんが。お嬢さん、一人で？」

「ええ。どうも落ち着かなくて。」

老人は、「まあ、断る理由はないな。」と一応騎士へ目をやり、

彼が頷くのを確認してから「ついてきなさい。」と歩き出した。

「変わったことを思いつく娘さんだ。」

老人は独り言とも彼女に話しかけているとも分からぬ口調でそう言ったが、親切に彼女のお願いを聞き届けてくれた。

老人は避難所になつてゐる礼拝堂を通り過ぎ裏手にある崩れかかつたような建物へ入つて行つた。小部屋が並ぶ作りはこの教会の住人たちの個室であつたのだと思われた。廊下には埃がつもり、使われなくなつて久しいことが感じられた。

「ここにある道具を好きに使いなさい。使い終わつたら元に戻すようにね。」

建物の奥の小さな納戸には箒やモップが詰め込まれていた。建物同様に使われている気配のない生活の道具達だ。

「ありがとうございます」

アーニヤは早速、目ぼしい道具を抱えると目的の場所へと向かつた。

この日から、アーニヤが始めることにしたのは教会の掃除だ。汚れているところを、さらに汚すのは気にならなくても、綺麗なところを汚すのは心理的な抵抗があるものだ。すぐには上手くいかなくても、地道に続ければ少しずつ環境が改善できるだろうと考えたのだ。

掃除道具を一旦廊下の隅に下ろして、次は井戸から水を汲む。アーニヤの力ではバケツに一杯にした水を運ぶことはできない。かなり時間をかけてバケツに半分程水を汲むと共同の水場から順番に掃除を始めた。水で流し、たわしやモップでこすり、さらに水で流すことを繰り返す。流れていく汚れを見ているとふつつつと闘志のよくなものが湧きあがり、アーニヤは作業に没頭していった。

通りかかる村人達は一様に怪訝な顔をして、しかしアーニヤに声をかけることなく去つていく。水場、便所、外廊下それが終つたら礼拝堂の床と椅子。できれば騎士たちが食料を支給してくれる広い部屋も埃を払いたい。一日で終わる広さではないが数日続ければな

んとかなるのではないか。アーニヤは目の前の床を休まず磨きつつも今まで気になっていた場所と、その掃除方法を頭の中で思い描いた。

ワンピースの裾や袖が汚れることなど構わず、何度となく井戸と教会を行き来して夕日が落ちそうになってもアーニヤは掃除を続けた。

「アーニヤ。お前何やってんだ、飯の時間になっても来ないと思ったら。」

呆れた調子で声をかけられて振り返るとウィルだった。

「ああ、もうそんな時間なの。」

ずっと曲げっぱなしだった腰を上げて大きく伸ばすと、バキバキと骨のきしむ音がした。ウィルにも聞こえたのか、嫌そうに顔をしかめられた。

「何やってんだって聞いてんだ。誰に言われた？」

苛立った様子を不思議に思いながら、アーニヤは答えた。

「何って掃除よ。別に誰に頼まれたわけじゃないけど、皆で暮らすなら綺麗にしておいた方がいいでしょ。不衛生なのは病気の原因にもなるわ。」

そう言いながらも食事は食べなければと思い、アーニヤは道具を片付けはじめた。

ウィルはしばらく呆気にとられて黙っていたが、アーニヤが水の入ったバケツをえっちらおっちらと運ぼうとするのを見て、はっとすると横から手を出して奪い取った。

「お前、あっちの持てよ。こぼしそうで危なっかしいな。」

悪態をつかれてアーニヤは頬をちよつと膨らましたが、それでも「ありがとう」と言ってから道具を取りに戻った。

「こんなのどこから出てきたんだ。」

大きなモツプを絞るのを手伝いながらウィルが問うので、アーニヤは老人に頼んだのだと説明する。

「ああ、あのじいさんか。確かにこの教会の司祭だ。良く分かったな、司祭服も着てないのに。」

「司祭？」

アーニヤが首をかしげると、ウィルは彼女が記憶喪失であることを思い出した。こういう彼にしてみれば一般常識の範囲の情報もところどころ抜けている。

「神に仕える人のことだよ。普段はちゃんと司祭服っていう制服を着ているからすぐわかるけど、今はさすがに手に入らないんだろ。」
ウィルは物知りだ。他の子供より年上だということもあるかもしれないが、それを差し引いても何でもよく知っていると思うし、説明も上手だと思う。アーニヤが説明に礼を言うと、いちいち礼を言わなくていいんだって、と照れくさそうにそっぽを向かれてしまった。

「うふふ。かわいいー。」

アーニヤは小さい声で言ったつもりが本人の耳にもしっかり聞こえたらしい。ウィルは「なんだと。」と振り返ると「生意気言いやがって。」と睨みつけた。

アーニヤはふと不思議に思う。ウィルはどうやら彼女のことを年下だと思っているようなのだが、アーニヤは直感的にウィルは自分より若いと思うのだ。

「ねえ、ウィル。あなた今年でいくつになるの？」

思い立って聞いてみる。

「15だよ、春に15になったんだ。なんだよ、急に。」

もう先ほどの不機嫌さは無く、突然の質問に戸惑ったように返事をしてくれる。

「私は、何歳なのかなーと思って。ウィルが一番、年が近そうだから。」

参考までに聞いたのだというと、ウィルはアーニヤの顔をしばし

眺めてから、遠慮なく彼女の首から足までの間に視線を一往復させた。

「俺よりは下だろう。見た目は13歳くらいに見えるけど、それにしちゃ落ち着いてるよな。」

13歳。それは、なんとなく自己認識との間にギャップがある。

「13つてことはないと思うんだけど。」

一応反論を試みるが、記憶が無いのだから言いきれぬことは何もない。

「じゃあ、14つてことにしといてやるよ。」

あくまで自分よりは下だと思っっているらしい。ここで、自分の方が彼より年上だと思っなどといったらまた機嫌を損ねるだけだと思われた。納得行かないなりに、アーニヤはここが妥協点かと頷いた。少なくともウィルの前では14歳でいようと思う。

「よし、じゃあ。やっぱり俺の方が年上だからな。かわいいとか言うなよ。」

ウィルは満足げにそういうと、気前よく重い道具を抱えて片付けを手伝ってくれた。その姿はやっぱり可愛いと思ったのだが、アーニヤはにこにこするだけで口には出さないでおいた。

思わぬ余波

掃除道具を片付けて二人が食堂にたどり着いたころには、もう殆どの村人はいなくなっていて、子供たちだけが二人を待っていた。

アーニヤがやってきたのを発見した途端に、ミーナが涙目で駆けよってきた。そのままアーニヤのスカートに飛びついてしがみつく。「アーニヤ、あの、ごめんなさい。」

震える声で謝られて、アーニヤは不思議そうにミーナの顔を覗きこんだ。

「どうしたの？」

「だって。」

ミーナは目を赤くして首を横に振る。アーニヤはミーナの謝罪の意味が分からずに首をかしげるばかりだ。

「なんで謝るの？」

肩でも抱き寄せてやりたいが先ほど念入りに洗った手は冷たいだろうと思われた。他の子に事情を聞こうと見回すと、皆気まずそうに目を逸らしたり、うつむいたりする。

「何？みんなどうしたの？」

アーニヤはミーナだけでなく子供たちの一様に元気がない様子に驚き、隣に立っているウィルを見上げた。ウィルは困ったように子供達を見渡しているが、あまり驚いた様子ではない。

「ごめんねえ。」

ウィルに質問する前に、また一人幼い少年に謝られてアーニヤははてと首をかしげる。今日一日傍にいてあげられなかったから、怒っているだけでも思われているのだろうか。

「なんで謝るの？何も怒ってないよ？」

アーニヤが子供達を見回してそう声をかけると、子供たちは恐る恐るといった様子で顔をあげた。ミーナが意を決したように寄って

くる。

「だって、アーニヤ、今日ずっと大変。ミーナのせい？ミーナが良
い子にしてなかったからおじさん達に怒られた？」

なるほど、自発的にはじめた掃除を何かの罰だと勘違いしたよう
だ。そういえば、ウイルも声をかけてきたときに誰に言われたのか
と聞いていたが、そういう意味だったのか。以前に子供たちの遊ぶ
声がるさいと代表してアーニヤが怒られたことがあった。

「誰にも怒られてないよ。大丈夫。心配しなくていいんだよ。」
「でも手が真っ赤だよ」

ミーナは自分の目の前にある赤く冷え切ったアーニヤの手にまた
泣きだしそうな顔をする。

「平気よ。」

掃除を始めてからは、つい熱中してしまっただが、いつもそばにい
た自分が急にいなくなっただけで心配してくれたのだらう。もう少し子供
たちに声をかけてやらなければいけなかったかと反省する。

「今日は一緒に遊べなくてごめんね。みんなのおうちをね、もっと
綺麗にして楽しいところにしたいな」と思ってたね。」

そういつてにこりと微笑むと、横からウイルも口を挟んできた。

「こいつは自分から掃除を始めなくなるほど、掃除が好きなんだと
心配しなくていいぞ。」

ふざけたような口調で彼がそう言っただけで、アーニヤの頭を掻きまわ
すと子供たちは一様に驚いた顔をした。それから互いの顔を見合わ
せたり、何度も笑顔を浮かべているウイルとアーニヤの顔を確認し
てじわじわと緊張が溶けていった。

「掃除が好きだなんて。変なの！」

「アーニヤ、お嬢様なんじゃなかったの？」

アーニヤはやっぱりいつも通りに口を開きだした子供たちの様子に
安心して、テーブルについて食事を始めることにした。

「掃除が好きなのって、おかしいの？」

食事の途中でアーニヤがそう聞くと、子供たちは一斉に頷いた。

「そうなの？」

念のためウィルに確認すると、彼もスプーンをくわえたまま深く頷いた。

「どうして？」

彼女がそう聞くと、みな口々に返事をしてくれた。

「どうしてって、普通嫌いだよ。」

「楽しくないし。」

「好きな人なんて聞いたことない。」

しかし、その回答はどれもアーニヤを納得させるものではなかった。ただ、この村では掃除は歓迎されない作業だということは良く分かった。今日誰も手伝いを申し出てくれなかったのも、そういう背景があつてのことで意地悪ということではなかったのだろう。

「ふうん。身の周りが汚れているより綺麗な方がいいじゃない？ だったら掃除するしかないと思うんだけど……。」

アーニヤは首を傾げたが、子供たちもまた、彼女の言い分に納得いかないようだった。互いに腑に落ちないまま食事を終えて礼拝堂へ戻った。

どうも掃除という彼女にとっては当たり前の行動が、こちらでは受け入れられないようだ。

ちよつと相談

アーニヤは子供達を寝かしつけながら、明日以降のことについて思いを巡らせていた。

子供達に不安な思いをさせたくはないが、今の教会内の環境はやはり耐えがたい。

「ねえ。ちよつと相談したいんだけど。」

いつもは子供達を挟むように両脇に離れて寝ているウィルとアーニヤだが、子供が寝静まった後で小声で話すにはその距離は遠すぎる。アーニヤがウィルの隣を指さして行っついていいか、と聞くとウィルは壁に寄りかかって座った姿勢のまま寄ってくるアーニヤの為に少身体をずらして、自分の横をポンポンと叩いてみせた。

「ありがと。」

アーニヤはそつとその隣に腰を下ろす。

「なんだよ、改まって相談なんて。」

大きな瞳をまっすぐアーニヤの方へ向けて心配そうに問いかけられる。

見つめあうにはあまりに近い距離だったので、アーニヤは彼の投げ出している細くて長い脚の先の方をみつめて話し始めた。

「掃除、のことなんだけど。あれは、もしかしてやってはいけななことなのかな。」

「いけない?」

促すように聞かれて、軽く頷く。

「私は、あまり変わったことというか、変なことをしたつもりは無かったんだけど、みんなびっくりしてたし、心配もしてくれただし、よう?本当は明日も明後日も続けてやりたいと思っただけだけど、実はやってはいけないことだったんじゃないかと思っただけ。」

そこまで言いきってから、隣の様子を窺うとウィルは眉を寄せて「

うーん」と唸った。

「いけないってことはない。ただ、掃除って言うつと罰掃除の印象がな……。なんか悪いことをするとやらされるといっつか。」

「すこし伸びてきた黒い髪を掻きあげながらそういう口調はやや苦い。でも、家の掃除とかはどうしてたの？しないわけにはいかないでしょう？」

「床を磨いたり、今日アーニヤがやってたようなことは掃除屋の仕事だよ。普通の村の連中はやらない。それこそ罰掃除くらいだ。」

「掃除屋？」

「人の家の掃除をして、金をもらって、それで生活する人のことだよ。」

「それは、普通の村人じゃないの？」

「アーニヤの頭の中では掃除が仕事として成立するところまでは理解できるが、それが「普通の村の連中」に含まれないところが分からない。」

「墓掘りと一緒だ。村にいるけど村人には数えない。」

「あっさりと言いつ返されて、アーニヤは目を瞬かせた。」

「人なのに、人だと思わないってこと？」

「ウィルは、その質問にぎょっとしたようにアーニヤを振り返った。」

「馬鹿、人は人だよ。村人じゃなかったって人間だ。」

「アーニヤは益々混乱する。」

「村人とそういう人の違いってなんなの？」

「村に税を納めないし、村のルールにも含まない。でもそれだけだよ。あとは変わらない。同じように飯も食うし、話もする。」

「アーニヤは眉を寄せて考え込んだ。話を聞く限り、人に厭われがちな仕事を引き受ける人々で特別な扱いを受けているようだが、それが悪いのかそうではないのかが分からない。」

「よく、分からないな。」

ただ、そう呟くとウィルもそれ以上説明する術がないのかしばらく

黙りこんだ。

「で、掃除は普段掃除屋さんの仕事だとして、ここにそういう人はいないの？ だったら私が続けても誰かの仕事をとったことにはならないよね？」

考え込んだ後で、アーニヤがそう結論づけてウィルに問うと、ウィルは驚いたというか呆れたような顔をでアーニヤを見下ろした。

「こだわるなあ、お前。掃除屋も何人かここにいるけど、ここまできて仕事とか言わないだろう。お前が掃除して誰かから金をもらうんじゃないけりや大丈夫だろ。しかし、なんでそんなに掃除が好きなんだ？ 信じらんねえ。」

「なんでかって言われても、ただ、なるべく綺麗な家に住みたいって思わない？ だったら自分で綺麗にしたらいいと思うだけよ。」

ウィルは「だけねえ。」と言いながら首を傾げたが、納得しなくてもアーニヤを止めるつもりはないようだ。

「まあ、無理はするなよ。重いもの運ぶくらい手伝ってやるから声かけるよ。」

そういつて骨ばった手でアーニヤの頭を力任せにわしわしと撫ぜる。「わ、痛いって。でも、ありがとう。チビ達をほつたらかしにし過ぎないように気を付ける。今日はみんな押しつけちゃってごめんね。」

その手から逃れながらアーニヤが礼を言うと、ウィルはいたずらめいた表情から優しい目になって、につこりと笑った。

「気にするな、アーニヤが急に来なかつたら元々俺が一人で面倒をみていた奴らなんだから。よくやってくれてるよ。」

今度は優しく、改めて頭を撫でられてアーニヤは少し恥ずかしくなる。

(急に大人びた顔をして)

内心だけで文句を言いながら、彼女は黙って頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4982y/>

愛していると言えは、嘘になる

2011年11月22日03時16分発行